

絵画空間幻想

近年、日本のノーベル賞受賞者が相次いでいる。特に物理分野が顕著で、クオークモデルやニュートリノの質量など、これまで架空の世界のように思っていた世界が身近で現実のものとなってきている。この世界は17種類の素粒子から出来ているそうである。直接見ることが出来ない素粒子なのにどうして確かめられるのか。その根拠は、自然は数学的構造を持っていることへの強い確信にあると思われる。基本法則は数式で表現されることがガリレオ以来の近代科学の思想である。

当然、芸術表現としての絵画空間も、自然を対象とする限り、現代科学の自然観に大きく依存することになる。

虚像というものは、実物のように実態のないもののように思われがちだが、本当にそうだろうか。物理の基本法則は、空間を反転しても、さらに、時間反転に対しても変わらない。すなわち、虚像と実物は同等で区別できない。たとえ人間の五感と矛盾していても、この世界は方程式で表現されるという現代科学の理念とともに、厳密に観測結果とも合っている。

物理モデルにより自然は表現されるように、絵画空間も絵画モデルで表現できると思う。例えば、量子（quantum）は粒（局在性）と波（周期性）と言う相反する性質を持っているが、絵画では、点描を粒に、オプアートを波に対応させることも可能である。荒っぽい見方をすると、抽象画は解析力学にも対応するのではないか。1900年前後のはぼ同時期に表れているのも単なる偶然とは思えない。あのダリも相対論に強い影響を受けた作品を制作している。マーク・ロスコの絵は波の独立性を内包しているように見える。